

令和5(2023)年度 入学式式辞

駒場東邦中学校第70回生諸君、ご入学おめでとうございます。

燃え立つような新緑が美しく映えるこの佳き日に、澁刺とした君たちを新入生として迎えることができたことは、教職員および在校生一同にとって、これ以上ない喜びとするものです。私たちは、70回生諸君を、心より歓迎いたします。

また、ご父母ご家族の皆さまには、お喜びも一入のことと拝察いたします。本日ご参列いただくにあたりましては、新型コロナウイルスの社会的感染状況に鑑み、それぞれに、マスク着用についてのご判断をお願いいたしました。制限が緩和される方向であるものの、感染状況には一抹の不安もあり、ご判断は難しいものであったかと存じます。しかしこうして皆さまよりご理解を賜り、ご息がたの大切な節目の式を執り行うにあたり、同じ会場で同じ喜びを分かち合うことは、大変意義深いことと感じております。改めて御礼を申し上げるとともに、重ねて心よりのお祝いを申し上げます。

さて、新入生諸君、君たちは厳しい入学試験を勝ち抜いて、本日この入学式を迎えることができました。今は、誇らしい思いで満たされていることと思います。そして、これから君たちが過ごしていく充実した日々思いを馳せ、奮い起つ気持ちになっているのではないのでしょうか。「奮い起つ」とは、これから大いにやっつけようと勇気を奮い起こすことを示しますが、この言葉の前提には、実は逆に意気消沈してしまう状況があるのではないかと私は思っています。黙っていればつい心がしぼんでしまうから、あえて勇気を振り絞るわけです。そして、奮起せよと自分に言い聞かせるのです。いかがでしょうか。君たち自身の今の心には、しぼんでしまいそうな様子は見出せますか。よく観察してみてください。人は、新たなスタートを切ろうとするとき、緊張してしまうものですね。知らないところに足を踏み入れて、この先どのようなことが自分の身に降りかかってくるか、それに対して自分はどのように対処していけばよいか、そう思うとどうにも心が落ち着かないから緊張が起こるのであって、これが、先ほど申し上げた「ついしぼんでしまう心」にあたるのです。つまり、「奮い起つ」とは、この先自分はどうなっていくか分からないけれども勇気をもって進んでいこう、と思う心を言うのであり、これをさらに言い換えれば、失敗を厭わずに進む意志ということになります。

明日から君たちは、毎日一人で通学することになります。入試前までは憧れの対象だった駒場東邦での生活が、じきに普通の代わり映えのしない日常になっていくわけです。そのような日常において人は、失敗を避けようとしがちです。失敗は痛みを伴いますから無理もないことですが、それを避けるために、出来合いのいわゆる正解とされるものを示してもらって、そこに安住しようという心が生じてしまうのは、非常にもったいないことです。学びに対する高い意志をもった学友が集ったこの駒場東邦にしながら、自ら主体的に学ぶ機会を逸することになるのです。ですから私は、君たちに、今日の「奮い起つ心」すなわち「失敗を厭わずに進む意志」を忘れないでほしいと申し上げたいと思います。まさに「初心忘るべからず」です。ここで特に大事なことは、「失敗を厭わない」という要素です。失敗することを通じてこそ、私たちは、この先に未知の世界が広がっていることを知り、さらなる探究に駆り立てられるものです。つまり、失敗こそが学びの原動力であり、学びのステージをひとつ昇るチャンスであるわけです。また、失敗の経験は、他者の失敗への寛容の心を育てます。その経験の積み重ねが、異なる価値観を持つ他者への共感と相互の尊敬を生み、さらには多様性への積極的なアプローチへとつながっていくのです。君たちには、この駒場東邦に集った学友たちと、共に失敗しなが

ら切磋琢磨することで、伸び伸びと、思いどおりに、学びの裾野を広げて行ってほしいと願っています。

このことは、実は、駒場東邦が生徒諸君に培ってほしいものとして創立以来大事にしている二つの柱に直結しています。すなわち、「科学的精神」と「自主独立の気概」です。

このことを、君たちの受験勉強を振り返ることを通して考えてみましょう。君たちは、この3年間社会を支配していたコロナ禍のなかで受験勉強に取り組んできました。学習の進度に不安を感じたり、様々に課せられた制約からストレスを被ったりするなかで、それらに打ち克って目標を達成したことは、とても自信になることだと思います。また一方で、難しい状況下でも変わらずに君たちを支えてくれたご家族への感謝を、強く感じていることでしょうか。いずれも大事なことですが、ここで思い返してほしいのは、受験勉強の合間に、コロナ禍における社会状況が君たちにどのように見えていたかということです。医療従事者の皆さんの奮闘や、停滞する経済のあおりを受けた人々の苦しみ、表向きの正義感の陰に潜む差別や誹謗中傷について、様々な報道がなされていましたが、それらについて君たちは、コロナ禍に翻弄されている当事者として、心から感動したり、悲しんだり、悔やんだり、共感したりしていたのではないのでしょうか。また、世界に頻発する悲惨な紛争や未曾有の災害に見舞われ、苦しみ嘆く人々の様子を、直接の当事者でなくても、それに限りなく近い共感をもって見守っていたのではないのでしょうか。このように、当事者意識を持って、自分の感受性でキャッチした自然現象や社会現象を、自分の頭で考え、自分の言葉で体系的に表現していこうとすることが、まさに本校の建学の精神を構成する「科学的精神」であり「自主独立の気概」にあたるのです。ここで言う当事者意識とは、先ほど述べたような、出来合いの正解に連れて行ってくれる借り物の方法に依らず、自分を奮い起たせて、失敗を厭わずに学ぶ意志をもつことに他ならないのです。この意志をもって学んでいく先には、多様性に満ちたこの世界において、かけがえのない“ひとり”として、他者との深い共感に裏付けられた関係性を築いていく君たちの姿があります。コロナ禍の不安を乗り越えてここにいる君たちであればこそ、必ずやしっかりと辿っていつてくれる道筋であると思います。

70 回生諸君は、これからまさに多感な青春時代を過ごしていくこととなります。青春とは、その明るくエネルギッシュなイメージとは違って、実は、悩み多き停滞の季節です。どうぞ大いに悩んでください。君たちが、真正面からその悩みを受け止めつつ、意志をもって学ぼうとする限り、我々はとことん付き合っていきます。そして、君たちがこの駒場東邦で、思う存分活躍するのを、大いに楽しみにしています。

この期待の念を、ここに集った皆さまと共有して、本日の式辞といたします。

令和5(2023)年4月8日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦